

「協働」と「連携」によるまちづくり⑬  
 新潟県燕市・三条市が推進する地域産業活性化の取り組み

# ものづくりの現場を開放し 消費者との交流で 産業展開の方向性を見出す



## 【写真】

- 1 銅の「鋳起」で有名な玉川堂(ぎょくせんどう)(燕市)での見学風景
- 2 期間中に開催された「燕三条トレードショー」
- 3 包丁研ぎ体験を実施する庖丁工房タダフサ(三条市)
- 4 国から「伝統的工芸品」に指定されている「越後三条打刃物」
- 5 「購場」のひとつである燕三条地場産業振興センター

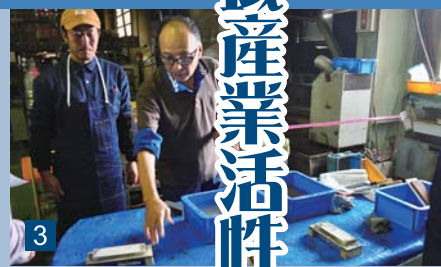
「オープンファクトリー」という取り組みに注目が集まっている。経済産業省によると、この取り組みは、「地域産業の歴史と価値を改めて見直し、地域産業を活性化させ、新しい産業展開の方向性を見出す可能性を秘めている」としている。今回は、新潟県三条市と燕市で開催されている『燕三条 工場(こうば)の祭典』を紹介したい。

## 伝統産業の衰退という危機感で 消費者ニーズを探る

新潟県の燕・三条地域は、「叩く」「抜く」「磨く」などの伝統的な職人技を誇る金属成型加工の事業者が集積する「ものづくりのまち」である。

その燕・三条地域で、10月5日から8日までの4日間、「第5回燕三条 工場(こうば)の祭典」が開かれ、県内外から約5万3,000人が訪れた。

このイベントは「工場・耕場・購場」を訪れて、その仕事を間近に見て、対話し、ものづくり体験などに参加して、燕・三条地域の産業を体感することができるというもの。地域内の事業者103社が参加して、金属加工の製造業をはじめ、木工業、農業、食品製造業、印刷デザイン業など多岐にわたり、他地域にない珍しい取り組み



■燕市・三条市情報■  
 【人口】  
 三条市:99,337人、燕市:80,696人  
 (平成29年10月末現在)  
 【面積】  
 三条市:432km<sup>2</sup>、燕市:110.96km<sup>2</sup>  
 【発電所データ】  
 東北電力(株)笠堀水力発電所(三条市)





玉川堂(燕市)の工場



コツコツと音が鳴り響く玉川堂の鋳起作業



玉川堂の「鋳起銅器」製品。その伝統技術を200年に渡って継承している老舗企業



玉川堂は1816年創業。1枚の銅板を叩いて継ぎ目のない急須などを作る高い技術で知られる

みとなっている。そのほとんどが「工場見学」を受け入れ、「ものづくり体験」や「ワークショップ」を開催している。

三条市と燕市の金属加工の歴史は古く、江戸時代初期に、信濃川の氾濫に悩まされた領民を救うため、江戸から鍛冶職人を招き、農家の副業として「和釘」の製造を始めたのが始まり。その後、三条では大工道具や包丁などの刃物に、燕では煙管、銅器、金属食器などの製造に発展して、今では、この地域に約4,000社の事業者が集積している。新潟県全体のおよそ4割の事業者が集中し、「人口比あたり」日本で一番社長の多いま

ち」などとも呼ばれている。特に刃物は「三条の打刃物」、「燕の抜刃物」と呼ばれ、切れ味が良い。その切れ味は長く続き、研ぐことによって再び優れた刃物として蘇る。そしてなにより、風格があることで、プロの料理人に愛されている。

また、燕市の「磨き」は、製品になる直前の仕上げの工程で、「iPod」の「鏡面磨き」に代表されるように、その優れた技術は世界的に知られるようになった。さらに、1枚の銅板から小鋳で叩いて壺や急須などに成型する「鋳起」技術も有名である。

「現場を開放して交流を深める」が失われていく」という危機感があつた。

また、金属加工業の基盤となる「鍛冶屋」は、商品の販売自体は問屋に頼んでいる小規模の事業者が多く、かつては問屋が商品の企画提案、マーケティングの役割も担っていた。しかし、最近は商品を小売店に卸すだけの問屋が多くなってしまい、「鍛冶屋」はなかなか新しい商品や、売れる商品を作れないという状況に陥った。そうした危機意識の中、業界と行政は、販売戦略の見直しを図り、消費者ニーズを見極めるために、消費者と直接コミュニケーションを取れる機会を探ることになる。

今の後継者不足や、新しいニーズに対応できない経営環境などによって、事業所の数は高度成長期に比べて半分近くに減少した。小規模な事業所にとって、後継者不足は致命的だ。行政も、この地域の基盤である金属加工業の衰退で「その技術

話は、5年前の平成24年に遡る。当時、三条市では前述の背景もあつて、平成19年から「越後三条鍛冶まつり」を開催していたが、「商品の良さを消費者に、どうしたら理解していただけるか」という課題が浮かび上がっていた。そこで「いつそのこと現場を見ていただいたほうが、消費者とのコミュニケーションが深いのではないか」という意見が事業者から出た。「オープンファクトリー」である。事業者はものづくりの現場を公開し、交流することで、自社製

## 現場を開放して交流を深める 『燕三条工場(こうば)の祭典』を開催

品や仕事に対する生の声、新たな気づきを得ることができ、来場者にとつても、普段は見ることができない工場現場は、「非日常のエンターテインメント」であり、その価値を知ることができるといえるものだ。

それを聞いた当時、東京の外部の相談役であり、現在、「工場の祭典」の全体監修を務めるディレクターから、「もっと大々的な工場見学のイベントにはどうか」という提案を受けることとなる。「モノができる背景にあるコトも

同時に発信していこう」というアドバイスであった。

こうして『越後三条鍛冶まつり』は、「ものづくりのストーリー」を発信するイベントとしてリニューアルされることとなった。

そんなとき、隣の燕市の事業者から、「一緒にやりたい」という申し出があつた。県外の人にとつては三条市単独よりも、「燕・三条」として開催したほうが、知名度もありPRにもなるだろう、ということで、三条市40社、燕市14社で『燕三条 工場の祭典』としてスタートすることになった。

第1回の来場者は約1万人。想像以上の盛況ぶりだった。第2回



研磨業の後継者育成などを目的に設立された「燕市磨き屋一番館」(燕市)では、研磨された小型ジェット機の主翼が展示されている



「燕市磨き屋一番館」では「いしがた県央マイスター」が指導にあたる



「近藤製作所」のモットーは「道具の良さは作業性の良さ」



創業100余年で鍛冶屋としての技術を代々継承している「近藤製作所」(三条市)

「第4回からは、「工場」に「耕場」が加わり、「KOUBA」に対象が広がった。

燕・三条地域では、農業は昔から盛んで、果樹栽培にも力を入れてきた。また、食器を製造していることもあり、「食」というキーワードを通じて金属加工工業は農業とも繋がっている。そういうストーリーを持たせつつ、農業も燕・三条地域の産業の一体としてPRしたいと、農家も「耕場」として対象に加えた。

また、「購入」の場をイベントに組み入れたのは、製品の流通事情により、直接製品を販売できない工場が多い中、工場で作っている製品を購入したいというお客さんの要望をかなえるため、金物の販売を行う小売店を中心に対象に加えた。

第2回からは、工場見学・体験のほかに、様々なテーマを設けたオフィシャルバスツアーも開催している。

## 「工場で人を繋げる」というコンセプト

第1回の開催から、変わらぬコンセプトは「工場で人を繋げる」というものだ。第1回目の実行委員長で、包丁製造業の経営者である曾根忠幸さんの意見だった。

「このコンセプトは、ものすごく大事なことだと思っています。この地域で作られる商品は、価格帯の高いものが多いので、単純な価格競争では不利です。しかも少人数の事業所が多いので、経営資源が乏しく、新商品を逐一出すことも簡単ではない。それ以外の道で販路を確保するようになったときに、やはり消費者に「ファン」になってもらうことが必要なのです」と語るのは、最初の立ち上げから現在まで携わってきた、三条市商工課の澁谷一真さんだ。

「来場者の数をみれば多いほうが嬉しいですが、単純に数だけでは重要ではありません。どれだけ消費者と職人とのコミュニケーションができたか、ストーリーを伝えられたかなどを、大事にしたいのです」

来場者と思いを共有することに意味があると、本年度の実行委員長であり、金型製造会社の経営

者の武田修美さんも口を揃える。

現在、燕・三条には約4,000社の事業者がいるが、今年度は、そのうち103社が第5回「燕三条工場の祭典」に参加した。第1回に比べると大幅な増加である。しかし、すべての事業者が参加すればよいわけではない。多くの事業者のなかで、技術力のない会社もある。そのようなところが参加しても、イベントの質を下げってしまう。

そのため、「工場で人を繋げる」というコンセプトと、5つのステートメントによる行動指針に基づいて、イベントが運営されている。

それは、「①工場（こうば）では誇りを持って何事も全力で取り組む事 ②工場（こうば）でものづくりの本質を人々に体感してもらう事 ③工場（こうば）が活性化することで、地元の雇用に貢献する事 ④工場（こうば）での仕事の子供達にとって憧れや夢となる事」



三条市商工課主任 澁谷一真さん

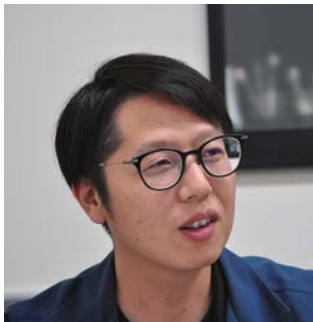
三条に伝わる鍛造技術を継承しながら常に新しいチャレンジを続ける「庖丁工房タダフサ」(三条市)

「庖丁工房タダフサ」会長の曾根忠一郎さん。息子の忠幸社長は第1回の「工場の祭典」実行委員長でもある



る事 ⑤燕三条の工場（こうば）を、ものづくりの聖地にする事」の5つである。

今後、この指針を各工場に浸透させていくことが大事だという。工場で作るものは、最終的に消費者の手に渡るものだ。だが、閉じられた空間からは、「消費者」という存在が見えにくい。それが、工場を開き、消費者と繋がって、消費者のことを考えてモノを作る



「第5回燕三条工場(KOUBA)の祭典」の実行委員長・(株)MGNET代表取締役武田修美さん

目の来場者は約1万2,000人、第3回目は約2万人、第4回目は約3万5,000人、第5回目の本年度は5万人を超える大規模なイベントとなったのである。

第1回の実行委員会事務局は三条市だけだったが、2回目以降は三条市・燕市の行政、それに両市の商工会議所などの出資により設立された公益財団法人燕三条条地場産業振興センターが加わって運営することになった。



「耕場」のひとつ宮路農場(燕市)



野菜を育てる畑はすべて水田からの転換。主な栽培はアスパラガスの「宮路農場」

ようになる。また、来場者の生の声を聞くことによって職人たちのプライドが高まっていく。そして後継者も育っていく。

こうしたことがこの5年間の成果だと、武田さんは言う。



精度の高い技術力が注目されている「武田金型製作所」(燕市)



創業は1771年。酒蔵から味噌蔵開業の歴史をもつ「越後味噌醸造」(燕市)



金型工場の子会社として製造だけでなく企画・開発・販売などを手掛ける「MGNET」(燕市)

## イベントに参加する意味をそれぞれの企業が考える

実は、三条市と燕市は、江戸時代に商人と職人間の商売で、領主に訴えて争ったという経緯がある。今は、燕市と三条市を行き来しないと経済圏としては成り立たず、若い世代にとっては燕・三条の間の壁というのはほとんどない。しかし、一部の年配の世代の中には、まだその壁は残っているようだ。三条市の事業者はマーケティングや商品開発を昔から問屋に依存していたため、相対的には事業者の経営立て直しなどを、自ら積極的に実施していく傾向が少なく、行政も産業の立て直しに熱心だった。

一方、燕市の事業者は、以前から販路開拓や商品開発を自前で行っている事業者が多く、「日本金

属洋食器工業組合」などの大きい組合が燕市にあるなど、製造事業者側が自ら販路開拓に頑張っているまじだった。そのため、行政による事業者への支援がそれほど必要とされてこなかった。

このイベントの開催によって、行政間連携のハードルが相当低くなったと、三条市の澁谷さんは感じている。燕市の事業者さんから行政への働きかけがあったからこそ動けたことも大きい。また、実行委員会のメンバーの平均年齢が40代と若く、一体で地域を盛り上げていこうという気運は高い。

「この地域の地場産業全体の振興を考えていくときに、燕・三条一体で考えられるということが、今や当たり前になりました。これはこのイベントの効果によるものだと思います」と澁谷さんは言う。

第4回までは、どちらかといえば、行政が実行委員会事務局を引っ張ってきたが、第5回では、任せられる部分は事業者側に任せるようにした。「今後はこの取り組みが行政の手をなるべく離れ、事業者だけで回していけるようになれば理想」とのことだ。

ただ、課題がないわけではない。「オープンファクトリー」は、防

塵対策や、製品や技術の情報漏えい防止策など、新たな負担を工場側に課すことが多い。

また、見学の受け入れ人数を超えての来場で、説明ガイドが不足することや、駐車場不足を危惧する工場もある。実際に、オープンにしている工場は全体の数パーセントに過ぎない。

「最終製品だけで伝わらないストーリーをどうやって伝えるかを考えたとき、たどりに着く答えのひとつが工場見学です。ただ、必ずしも『工場の祭典』で工場をオープンしなければいけない、という訳ではありません。自分たちがイベントに参加する意味を、それぞれの企業が考えることが大事だと思います」と武田さんは語る。

「オープンファクトリー」は、いわゆる「産業観光」に位置付けられるのが一般的だ。しかし、このイベントは、その括りだけでは捉えきれない印象がある。

「自分たちが大事にし、誇りにしている工場・技術があり、その良さを共有できる外部の人たちに工場を巡ってもらおう」という意味で、実行委員の1人が以前言

っていたのは、「巡礼」という言葉だそう。一般的に巡礼とは宗教の聖地や聖域に参詣して、聖なるものにより接近しようとする宗教的行為を言う。その意味では、技術を極めようと不断の努力をする「造り手」と、それに魅せられた「使い手」が交わる場が、「ものづくりの聖地になる事」を目指す『工場(KOUBA)の祭典』なのだろう。KOUBAは「交場」の意味も持つのもかもしれない。地帯資源という光を磨く人、それに魅せられる人との間に起こる「触発」が新たな価値を生むという意味で、この「交場」は、燕・三条地域で今後どのような「輝き」を見せてくれるのだろうか。



三条市の研修施設で後継者の育成やものづくり体験、総合学習の場として活用されている「三条鍛冶道場」